

## 6. 県内で19年ぶりに発生した採卵鶏農場の伝染性ファブリキウス嚢病

香川県東部家畜保健衛生所 さかしたなつみ ○坂下奈津美 いのうえひでゆき 井上英幸

【発生状況】平成27年2月19日、採卵鶏農場から死亡羽数の増加を主徴とする病性鑑定依頼があった。37日齢の育成鶏舎（33,880羽飼養）で1週間の死亡率（0.43%）の増加が見られた。成鶏舎（117,000羽飼養）では、異常は無く、伝染性ファブリキウス嚢病（以下IBD）ワクチンは、21日齢と28日齢で接種済みであった。

【材料と方法】①剖検及び病理組織検査、その他精密検査；生鶏6羽、死亡鶏9羽（ジュリア、ソニア、ポリスブラウン各5羽）について剖検を実施した。病理組織学検査は15羽（内1羽は免疫染色を実施）を、細菌検査は各鶏種の生鶏と死亡鶏各1羽の計6羽を、血液検査は生鶏6羽を用いた。②ウイルス検査；細菌検査と同様の6羽について、ファブリキウス嚢（以下F嚢）乳剤を材料にIBDVの遺伝子検査とウイルス分離を実施した。遺伝子検査は、VP2領域を標的としたRT-PCRを実施し、検出された領域のシーケンス解析をもとに系統樹解析を行った。ウイルス分離は発育鶏卵漿尿膜上接種で回収した材料を用いてRT-PCRを実施した。③IBDV抗体検査（中和試験）；剖検時の生鶏6羽をプレ、IBD発生2か月後の同一鶏群の15検体をポストとして、IBDV BK-1株、CEF細胞を用い、×10から2倍階段希釈で実施した。

【結果】①剖検でF嚢の腫脹が見られ（9/15羽）、病理組織検査ではF嚢のリンパ球減少が見られ（15/15羽）、F嚢リンパ濾胞内のマクロファージにIBDV抗原が認められた。細菌検査では、有意菌は分離されず、血液検査では尿酸値が軽度に上昇（6/6羽）を示した。②全ての検体（6/6羽）がRT-PCR陽性、ウイルス分離陽性であった。シーケンス解析の結果、検出されたのは同じ株で、タイの株（2006年報告）やベトナムの株（2014年報告）と100%一致した。接種ワクチン株であるルカード株との相同性は96%であった。系統樹解析の結果、古典的タイプに分類された。③抗体価は、プレは173（GM値）、ポストは全て×20480≦であった。

【まとめ】病性鑑定の結果、IBDと診断した。シーケンス解析より、今回の流行株は接種ワクチン株と同系統の古典的タイプであった。今後は、抗原性の相違についても考慮すべきであるが、抗体検査の結果から、今回の発症はワクチン抗体の上昇が十分ではなかったため、IBDの発症を完全に抑えられなかったものと考えられた。